

令和三年度 筑西市立下館中学校 第三学年二学期国語科期末テスト 問題用紙

令和三年十一月二十四日(水)実施

三年 組 番・氏名 ()

一次の①②④の—線の漢字には読み方を書き、ひらがなは漢字で書きなさい。(必要があれば送りかなも書くこと。)

- ① ひっそり閑ひそりとしている。
- ② 灯台下暗し。
- ③ 将棋のこま。
- ④ 席をゆずる。

二次の空欄に体の部分を著す漢字一字を入れ、慣用句を完成させなさい。

- ① 応援したチームが負けてしまい、()を落とした。
- ② 彼女の研究熱心な態度には()が下がる。

三次のことわざや故事成語と似た意味の言葉を下から選んで記号で答えなさい。

- ① 猿も木から落ちる。
- ② 蛇足
- ③ 泣き面に蜂。
- ④ 覆水盆ふくすいに返らず
- ⑤ のれんに腕押し
- ⑥ 五十歩百歩
- ⑦ 転ばぬ先のつえ

ア 弱り目にたたり目	イ 鬼の目にも涙
ウ けがの功名	エ 弘法 <small>こうぼう</small> も筆の誤り
オ ぬかにくぎ	カ 備えあれば憂いなし
キ 月夜 <small>つきよ</small> に提灯 <small>ちやうちん</small>	ク 針小棒大
ケ 後悔先に立たず	コ 大同小異

四 次の詩を読んで下の問題に答えなさい。

挨拶 ―原爆の写真によせて 石垣 りん

あ、

この焼けただれた顔は

一九四五年八月六日

その時広島にいた人

二五万の焼けただれのひとつ

すでに此の世にないもの

とはいえ

友よ

向き合った互の顔を

も一度見直そう

戦火の跡もとどめぬ

すこやかな今日の顔

すがすがしい朝の顔を

② その顔の中に明日の表情をさがすとき

私はりつぜんとするのだ

(1) ①「焼けただれた顔」とありますが、どんな人の顔ですか。次の文の空欄に入る言葉が詩の中から指定された字数で抜き出しなさい。

〔A 二字〕 〔B 九字〕 人の顔

(2) ①「焼けただれた顔」と対照的な表現を二つ、それぞれ九字で抜き出しなさい。

(3) ②「その顔の中に明日の表情を……私はりつぜんとするのだ」とありますが、なぜ作者は「りつぜんとする」のか、次から一つ選び記号で答えなさい。

ア いつ不幸に見舞われるかと常におびえていることに気づいたから。

イ 事件や事故がごく当たり前に起こるほど今の世の中は物騒だから。

ウ 今の平和が当たり前に続くと信じる危機感のなさに気づいたから。

エ 死というものが身近に思えるほどに自分は年老いてしまったから。

③ 地球が原爆を数百個所持して

生と死のきわどい淵を歩くとき

なぜそんなにも安らかに

あなたは美しいのか

しずかに耳を澄ませ

何か近づいてきはしないか

見きわめなければならぬものは目の前に

えり分けなければならぬものは

手の中にある

午前八時一五分は

毎朝やってくる

一九四五年八月六日の朝

一瞬にして死んだ二五万人の人すべて

いま在る

④ あなたの如く 私の如く

やすらかに ⑤ 美しく ⑥ 油断していた

(4) ③に使われている表現技法を書きなさい。

(5) ⑥「油断」とありますが、「油断」は、作者のどのような気持ちが含まれた言葉ですか。次から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 悲惨な戦争があったという過去を忘れて生きる私たちへの批判。

イ 未来のことを予測できると考える楽天的な人々に対する非難。

ウ 身近にある戦争の危機に対し無関心な私たちへの手厳しい警告。

エ 自分は二度と過去と同じ失敗は繰り返さないという強い決意。

(6) ④「やすらかに」⑤「美しく」の品詞名を次から選んで記号で答えなさい。

い。

ア 動詞 イ 名詞 ウ 形容詞 エ 連体詞

オ 副詞 カ 形容動詞 キ 助詞 ク 助動詞

ケ 接続詞 コ 感動詞

五 次の小説「故郷」を読んで問題に答えなさい。

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、^①
私は帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ、故郷へ近づくとつれて、空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音を立てて、船の中まで吹き込んできた。苦の隙間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。^②覚えぬ寂寥の感が胸に込み上げた。

ああ、これが二十年来、片時も忘れることのない故郷であろうか。

私の覚えている故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もつとずっとよかった。その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこで私は、こう自分に言い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだ。

――進歩もないかわりに、私が感じるような寂寥もありはしない。そう

(1) 目の前の①「故郷」はどんな様子でしたか。次の()に当てはまる言葉を文中から五字以内で抜き出しなさい。

(A) 村々が、いささかの (B) 横たわっていた。

(2) 「村々」以外に、②「寂寥」を感じさせるものを、次から二つ選んで記号で答えなさい。

ア 冷たい風 イ 船の中 ウ 苦
エ 隙間 オ 鉛色の空

感じるのは、自分の心境が変わっただけだ。なぜなら、^③今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから。

今度は、故郷に別れを告げにきたのである。私たちが長いこと一族で住んでいた古い家は、今はもう他人の持ち物になってしまった。明け渡しの期限は今年いっぱいである。どうしても旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、私が今暮らしを立ててている異郷の地へ引越さねばならない。

④ 明くる日の朝早く、私は我が家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、折からの風になびいて、この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を解き明かし顔である。いっしょに住んでいた親戚たちは、もう引越してしまった後らしく、ひっそり閑としている。自宅の庭先まで来てみると、母はもう迎えに出ていた。後から、八歳になる甥のホンル(宏児)も飛び出した。

母は機嫌よかったが、さすがにやるせない表情は隠し切れなかった。私を座らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引越しの話は持ち出さない。ホンルは、私とは初対面なので、離れた所に立って、じっと私の方を見つめていた。

(3) ③「今度の帰郷は決して楽しいものではない」とありますが、今回の帰郷の目的は何ですか。文中の言葉を使って、十五字以内で書きなさい。

(4) ④「屋根には一面に枯れ草のやれ茎が……」から感じられることを次から一つ選り記号で答えなさい。

ア 日当たりが良いこと。

イ 豊かな自然に囲まれていること。

ウ 家が古くて危ないこと。

エ 一族が没落し荒れていること。

(5) 上の文章は時間の経過で見ると、前半と後半に分けるとができます。その後半はどこからになりますか。後半の最初の四文字を書きなさい。



六次の文章を読んで問題に答えなさい。(読むこと各二点)

1

① はくたい くわかく 月日は百代の過客にして、行きかふ年

もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々

旅にして旅をすみかとする。古人も④多く旅

に死せるあり。予もいづれの年よりか、

片雲の風にさそはれて、⑤漂泊の思ひやま

ず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の

破屋に蜘蛛の古巢をほらひて、やや年も

暮れ、春立てる霞の空に、

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取って老年を迎える馬子などは、毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。(風雅の道に生涯をささげた)昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多い。私もいつの頃からか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出たい気持ちか動いてやまず、(近年はあちこちの)海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに(帰り)、蜘蛛の古巢を払って(住んでいるうちに)、しだいに年も暮れ、新春ともなると、霞の立ちこめる空の下で、

(1) ①「月日は百代の過客にして」と対句的に表現されている部分を抜き出さなさい。

(2) ③「日々旅にして旅をすみかとする」とありますが、どんな職業の人にあてはまりますか。現代誤訳から、二語、漢字で抜き出さなさい。

(3) ③「日々旅にして旅をすみかとする」から、作者がどのような生活を理想と考えていたことがわかりますか。次から一つ選びなさい。

ア たまに旅に出かける生活。

イ 旅が日常そのものの生活。

ウ 旅に出る目的を探す生活。

エ 旅をする余裕がある生活。

(4) ④「古人」に対して、作者はどのような思いを抱いていますか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 尊敬と憧れ

ウ 共感と親しみ

(5) ②「行きかふ」⑤「さそはれて」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

白河しらかはの関越えむと、そぞろ神のものに

つきて心をくるはせ、道祖神だうそじんの招き

あひて、取るもの手につかず、股引ももひきの

破れをつづり、笠かさの緒付けかへて、三里

に灸あしすゆるより、松島まつしまの月まつ心に

かかりて、住すめるかたは人にゆずりて、

杉風さんふうが別墅べつしょに移るに、

⑦ 草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面おもて八句を庵あんの柱に懸け置く。



白河の関を越えたいものだ、そぞろ神が
乗り移ったたもうそわそわとさせられ、
道祖神が招いているようで、何も手につか
ないほどに落ち着かず、股引の破れたとこ
ろを繕い、道中笠のひもを付け替え、三里
に灸を据える(など旅の支度にかかる)と
もう、松島の月(の美しさはと、そんなこ
と)がまず気になって、今まで住んでいた庵
は人にゆずり、杉風の別荘に移ったのだ
が、

元の草庵にも、新しい住人が越して

きて、私の住んでいた頃のわびしさ

とはうって変わり、華やかに雛人形

などを飾っている。

面八句を、(門出の記念に)庵の柱に

掛けておいた。

(6)「おくのほそ道」の旅に備えて、作者は、

どのような準備をしましたか。現代語で

三つ書きなさい。

(7)⑥「住めるかたは人にゆずりて」から、作

者のどのような思いがうかがえますか。次

から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 困っている人への親切。

イ 詩歌の道を究める決意。

ウ 旅に命をかける覚悟。

エ 財産や金銭への無関心。

(8)⑦「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」の句

で、「雛の家」と対照的に用いられている

語を俳句の中から抜き出さない。

(9)⑦の俳句の季語・季節・切れ字を書きな

さい。

(10)「おくのほそ道」について次の空欄にあて

はまる言葉を漢字で書きなさい。

「おくのほそ道」は、(A)時代の俳人

(B)が著わした紀行文である。

七 作文の問題です。前ページの江戸を出発し、「おくのほそ道」の作者は東北に向かいます。

そして、奥州平泉の地を訪れます。「平泉」は二〇一一（平成二十三）年、世界遺産のリストに登録されます。そこで、「世界遺産 —平泉の魅力語り—」の内容で、百八十字以上二百字以内の文章を書こう。

条件 ① 二段落構成とすること。

② 第一段落には、平泉の歴史的背景について書く。

③ 第二段落には、実際に見たり、調べたりした上であなたが感じたことを書く。

④ 文末は丁寧な言い方（敬体）で統一する。

⑤ 誤字・脱字、作文用紙の使い方に注意して書く。

※ タイトルは書かないこと。



源義経

